

「わかったこと」

本論文では、eラーニングの専門家を養成する熊本大学教授システム学専攻の創設から教育カリキュラムの開発について、インストラクショナルデザイン（以下、ID）の視点を踏まえてまとめている。具体的には、「教育課程の全体設計段階における質保証」、「組織・体制面での質保証」、「各科目コンテンツの開発段階における質保証」の3つの観点から、教育の質保証を目指している。それぞれの具体的な内容は下記の通りである。

教育課程の全体設計段階における質保証

IDの観点に基づいた場合、カリキュラムの出口、アウトカムが明確になっていることが必須であり、そのアウトカムを達成できるようなカリキュラムを構成する必要がある。そのため、熊本大学教授システム学専攻では、ibstpiによる「IDの職能4領域と23コンピテンシー」、日本イーラーニングコンソーシアムが検討している「eラーニング開発専門家人材像」、そして、「英国eラーニング専門家資格」を調査、教育サービス事業者数社にヒアリング調査を行い、「LMSなどの機能を活かして効果・効率・魅力を兼ねそろえた学習コンテンツが設計できる」といった12のコアコンピテンシーと7つのオプションコンピテンシーを設定した。このコンピテンシーに基づき、カリキュラムを設計した。

組織・体制面での質保証

熊本大学教授システム学専攻は12名の専任教員・兼任教員・12名の非常勤講師から構成されている。また、eラーニングコンテンツの管理・開発を担う組織として、教材作成室を設置している。教材作成室とは全学におけるeラーニング推進を支援するための組織であり、ウェブサイトのコンテンツ制作、管理、およびコース運営の実務を担当している。教員によるOJTを中心とした教育の他に、チームアプローチを通じたメンバー相互の学習、定期的なミーティングや掲示板を用いた知識・ノウハウ・作業状況の共有などを通じて、知識・スキル両面の向上を図っている。

各科目コンテンツの開発段階における質保証

各科目は主に「授業用のシラバスの作成」、「概要設計」、「プロトタイプ開発」、「コンテンツ開発」、「コンテンツレビュー」、「公開・運用」の流れで開発される。特にコンテンツレビューは「FESTA」と呼ばれ、プロジェクト管理上のマイルストーンとして専攻長をはじめとする教員と教材作成室スタッフが参加し月に2~3回開催される。この会議における承認が得られるまで「授業用のシラバスの作成」、「概要設計」、「プロトタイプ開発」、「コンテンツ制作」を繰り返す。このレビュー会を行うことで、コンテンツの品質管理上のチェックと

改善点の洗出しを行う。

指定論文を読んでわかったこととして、教育の質保証を行う場合、「教育課程の全体設計段階における質保証」だけでなく、「組織・体制面での質保証」と「各科目コンテンツの開発段階における質保証」も重要であるという点である。コンピテンシーに基づきカリキュラムを作成したとしても、そのカリキュラムを実現できる組織・体制面が整っていなければ、実現は不可能である。また、各科目のコンテンツを開発する段階で第三者の厳しい目が入ることで、カリキュラムとかい離するリスクが軽減される。教育の質保証といっても様々な視点があるということがわかった。

「疑問に思ったこと」

熊本大学教授システム学専攻が提供している科目では、提出するすべての課題をコンピテンシーと紐づけられている。本論文に記載されていないだけで実際には既に行われているのかもしれないが、コンピテンシーを元に自らが提出した学習成果物を振り返り、本当にそのコンピテンシーをみにつけることができたのかについて振り返る時間がほしいと感じた。そのため、本課題では、どのようなシステムを利用すればそのような仕組みを構築できるのかについて調査を行い、その結果をまとめる。

「調査結果」

教授システム学専攻では既に e ポートフォリオシステムとして **Mahara** を導入しているため、**Mahara** を利用することを前提とする。コンピテンシーを元に学習成果物の確認をする場合、まず同じコンピテンシーに対する学習成果物がページに一覧で表示されることが好ましいと考えられる。そのため、コンピテンシーをもとに表形式の評価表を作成することができ、学習成果物も容易に確認するループリックを作成するためのプラグイン（宮崎，2014）を **Mahara** に導入する。このプラグインは無料で公開されているため、人件費などを考慮しなければ、あらたに費用がかかることはない。

学習方法としては、科目の履修が終わる半年ごとに、複数の科目で提出した学習成果物を確認し、「自らがそのコンピテンシーを満たすことができたか」、「満たしたと考えるのなら、どの学習成果物が特にそのコンピテンシーと関連すると考えるのか」といった点について回答をしてもらい、全てのコンピテンシーについて振り返りを行う。その後、学習成果物と振り返りの際のコメントを他の学習者と共有し、相互コメントを行う。相互コメントの後、どのコンピテンシーをより充足させたいのかについて検討する。また、このように学習者にコンピテンシーを自覚させることで、卒業後も継続して学習する際に、コンピテンシーが学習の一つの指標となると考えられる。

引用文献

宮崎誠 (2014) Mahara とルーブリックによる e ポートフォリオの効果的な活用を考える.
MOF2014, 広島修道大学